

【漁況】 【マアジ】

1. 漁獲量の動向（農林統計）

全国のマアジの漁獲量は、昭和40年の53万トンにピークに減少傾向となり、昭和55年には5万4千トンとなりました。

その後増加傾向に転じ、平成8年には33万トンに増加し、平成10年までは30万トン台で推移しました。平成11年には大きく減少し21万1千トンとなりましたが、その後ほぼ横ばいで、平成17年は19万4千トンでした。

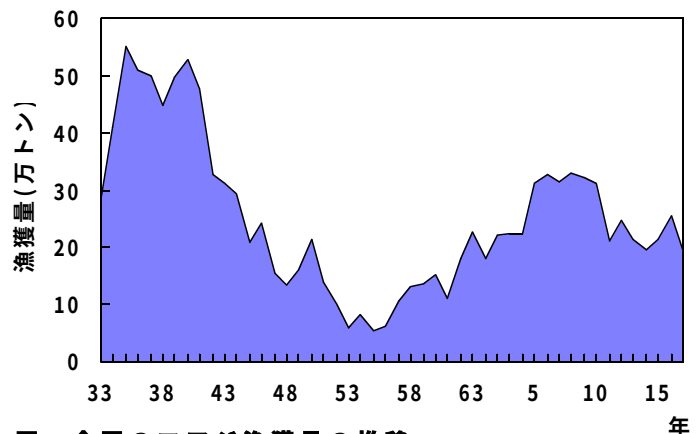


図 全国のマアジ漁獲量の推移

2. 平成19年1～3月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域では、長島沖～串木野沖、甑周辺に漁場が形成されました。

薩南海域では、佐多沖、内之浦沖に漁場が形成されました。

4港計のまき網では、豆アジ(1歳魚・平成18年生まれ)主体に1,461トンの水揚げで、前年の99%及び平年の120%でした。

3. 平成19年4～6月期の見とおし

漁獲の主体は、豆・小アジ（1歳魚・平成18年生まれ）でしょう。

来遊量は、低調であった前年を上回り、平年並みに推移するでしょう。

（根 拠）

漁獲の主体は、近年の漁獲パターンや現在の漁況経過から予測しました。

マアジ1歳魚は、現在までのまき網の漁況経過から、低調であった前年を上回り、平年並みであると考えられます。

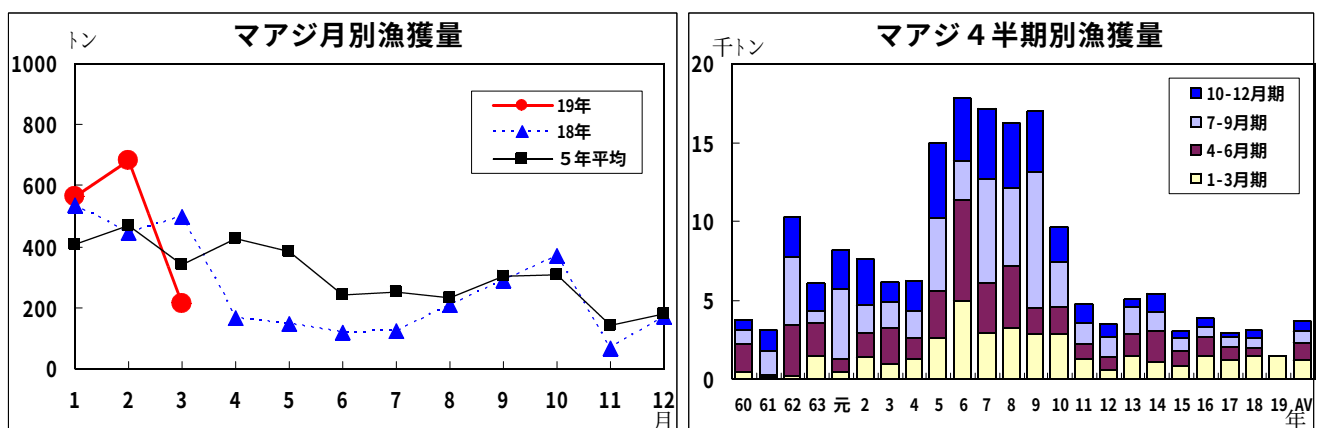


図 マアジまき網漁獲量変化(4港計)

※5年平均は平成14～18年の平均値、平成19年は3月28日までの水揚げ量を使用。

[サバ類]

1. 漁獲量の動向（農林統計）

サバ類の漁獲量は、昭和53年の160万トンにピークにマサバ資源水準の低下により年々減少し、昭和57年には72万トンとなりました。その後は、ゴマサバの増加により大幅な漁獲量の減少は見られませんでした。昭和63年以降はゴマサバの資源水準も低下したため、サバ類の漁獲量は大きく減少し、平成3年には26万トンとなりました。平成9年には84万9千トンまで増加しましたが、平成14年は27万9千トンに減少した後、増加し平成17年は60万4千トンでした。

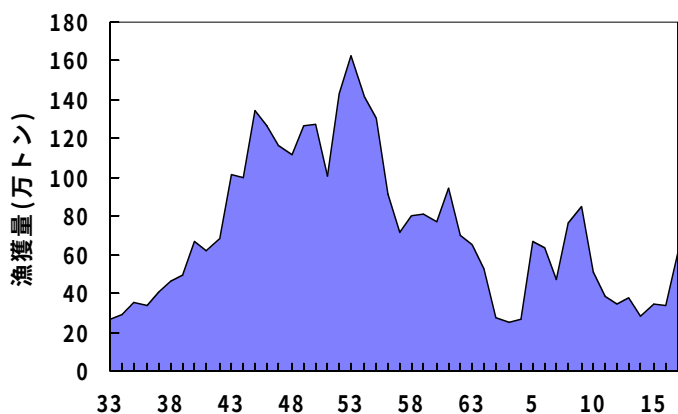


図 全国のサバ類漁獲量の推移

2. 平成19年1～3月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

薩南海域では、ゴマサバ主体に湯瀬、竹島、馬毛島が主漁場となった。

北薩海域では、マサバ主体に阿久根沖～串木野沖、甕東、縄瀬沖に漁場が形成されました。

4港計では、ゴマサバ中・中小・小（3歳魚・2歳魚・1歳魚：平成16年生まれ・平成17年生まれ・平成18年生まれ）及びマサバ豆・小（1歳魚：平成18年生まれ）主体に4,764トンの水揚げで、前年の89%及び平年の189%でした。

3. 平成19年4～6月期の見とおし

漁獲の主体は、ゴマサバ中小・中（3歳魚・2歳魚：平成16年生まれ・平成17年生まれ）及びゴマサバ中小・小（1歳魚・平成18年生まれ）となるでしょう。北西薩海域ではマサバ小（1歳魚・平成18年生まれ）が主体となるでしょう。

来遊量は好調であった前年を下回り・平年を上回るでしょう。

（根 拠）

漁獲の主体は、近年の漁獲パターンや現在の漁況経過から予測しました。

ゴマサバ3歳魚は、依然として来遊量が多く、前年・平年を大きく上回ると考えられます。

ゴマサバ2歳魚は、好調であった前年を下回るものの、平年を上回ると考えられます。

ゴマサバ1歳魚は、好調であった前年を下回るものの、平年を上回ると考えられます。

マサバ1歳魚は、前年・平年を大きく上回ると考えられます。

総合的にみて、好調であった前年を下回り、平年を上回ると考えられます。

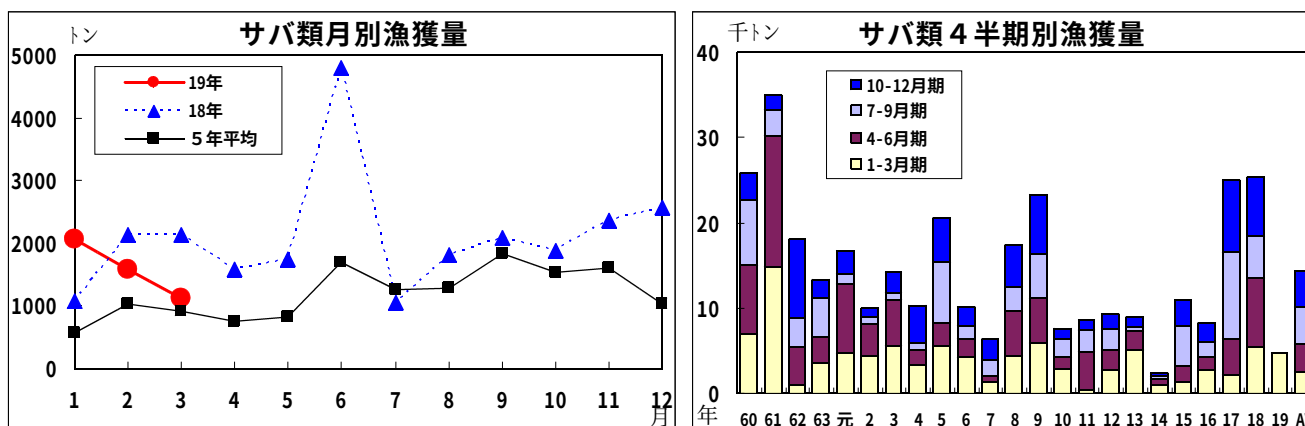


図 サバ類まき網漁獲量変化(4港計)

※5年平均は平成14～18年の平均値、平成19年は3月28日までの水揚げ量を使用。

[マイワシ]

1. 漁獲量の動向（農林統計）

全国のマイワシの漁獲量は、昭和30年代から40年代にかけての不漁期の後、昭和48年頃から増加の傾向が見られ、昭和63年には449万トンまで増加しました。

しかし、平成元年から三陸沖を中心に漁獲量が減少し始め、その後もマイワシの若齢魚の減少等により、全国的に漁獲量は減少を続け、平成7年には66万トン、平成10年は16万7千トンとなりました。平成11年は35万1千トンとやや増加したものの、その後減少し平成17年は2万8千トンでした。

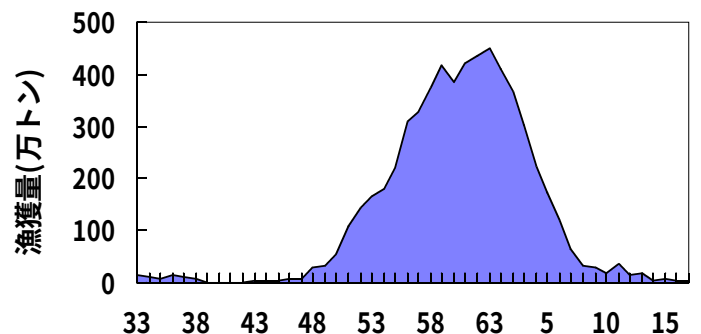


図 全国のマイワシ漁獲量の推移

年

2. 平成19年1～3月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

3月に甕島周辺にまとまった来遊が見られ、鹿児島県4港のまき網で341.4トン(前年比22,700%, 平年比20,029%)と前年・平年とも大きく上回り、10年ぶりのまとまった水揚げとなりました。

3. 平成19年4～6月期の見とおし

低水準ながら散発的な来遊があり、前年・平年を上回るでしょう。

（根拠）

マイワシ資源は全国的に依然として低水準にあるものの、昨年から本県や周辺の近隣県で散発的な水揚げが続いており、前年・平年を上回る来遊が期待できると思われます。

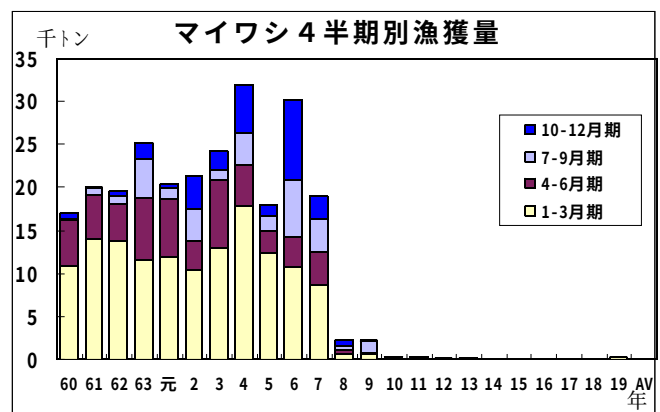
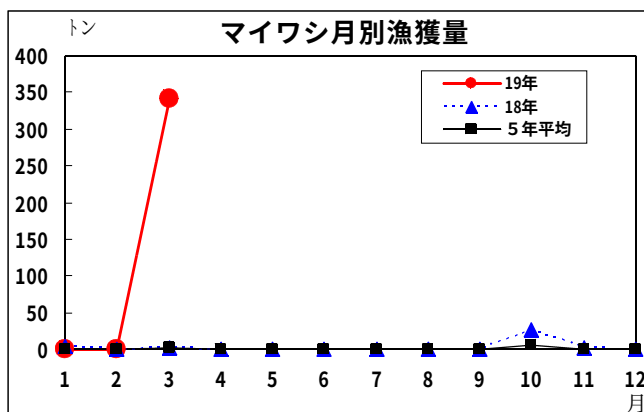


図 マイワシまき網漁獲量変化(4港計)

※5年平均は平成14～18年の平均値、平成19年は3月28日までの水揚量を使用。

[ウルメイワシ]

1. 漁獲量の動向（農林統計）

全国のウルメイワシの漁獲量は、昭和30年代後半から40年代前半にかけて3万トン前後で推移していましたが、昭和46年から54年まで5万トン前後で推移しました。昭和55年以降、漁獲量は減少し昭和60年には3万トンとなりましたが、その後、増減を繰り返しながら、増加傾向を示し、平成6年に6万8千トンとなりました。近年では再び減少傾向に転じ、平成12年は2万4千トン、平成17年は3万5千トンでした。

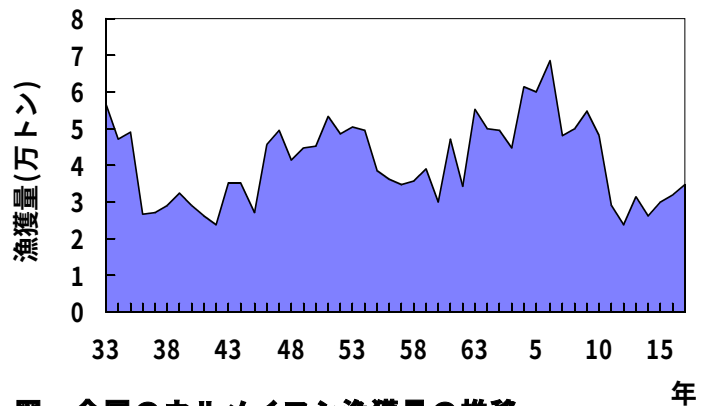


図 全国のウルメイワシ漁獲量の推移

2. 平成19年1～3月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

鹿児島県4港のまき網で364.0トン（前年比116%，平年比467%）と、前年を上回り、平年を大きく上回りました。北薩海域の棒受網でも77.7トン（前年比498%，平年比192%）と、前年・平年を大きく上回りました。

まき網・棒受網とも1歳魚の中～大羽銘柄を漁獲の主体で、好調な水揚げが続いています。

3. 平成19年4～6月期の見とおし

まき網では北薩海域・南薩海域とも中～大羽銘柄（1歳魚・平成18年生まれ）が漁獲の主体となり、北薩海域の棒受網では期間の前半は中～大羽銘柄（1歳魚・平成18年生まれ）が漁獲の主体で、期間の後半は小～中羽銘柄（0歳魚・平成19年生まれ）が漁獲の主体となるでしょう。来遊量は前年並みか前年を上回り、平年を大きく上回るでしょう。

（根 拠）

今期の漁獲の主体となる1歳魚（平成18年生まれ）のまき網による水揚げが好調に推移しており、来遊水準は比較的高いと考えられます。また1歳魚（平成18年生まれ）を産卵親魚とする0歳魚（平成19年生まれ）についても、来遊水準は比較的高いと考えられます。

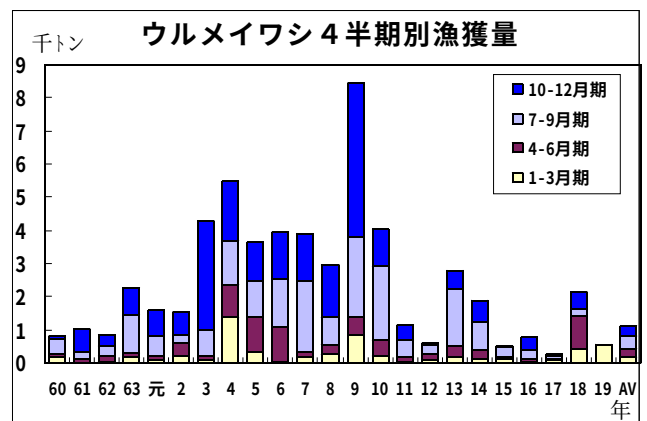
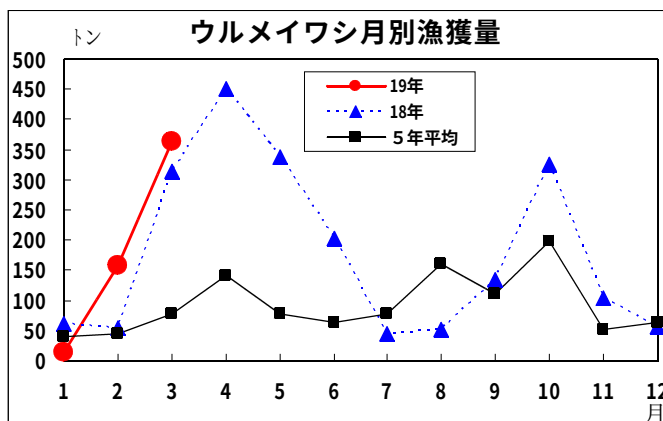


図 ウルメイワシまき網漁獲量変化（4港計）

※5年平均は平成14～18年の平均値，平成19年は3月28日までの水揚げ量を使用。

[カタクチイワシ]

1. 漁獲量の動向（農林統計）

カタクチイワシの漁獲量は、昭和48年まで30万トン台で変動していましたが、昭和49年以降減少傾向となり昭和54年には13万トンとなりました。その後、徐々に漁獲量は増加し昭和59年には22万トンとなりましたが、昭和62年には再び14万トンまで減少しました。昭和63年以降は大きく増減を繰り返し、平成13年は30万トン、平成14年は44万トンでした。平成15年は過去最高の51万7千トンとなりましたが、平成17年は再び大きく減少し、34万7千トンとなりました。

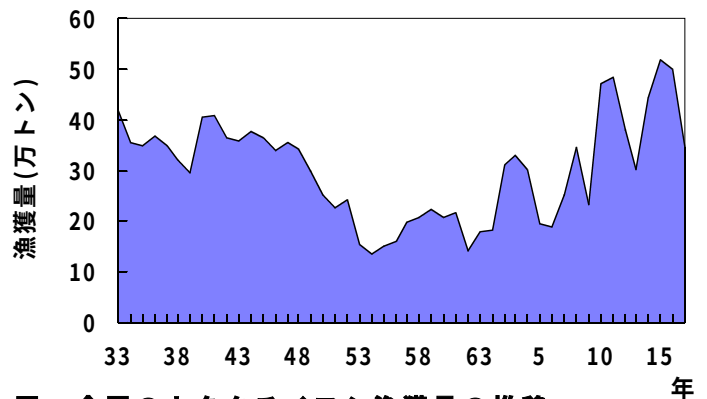


図 全国のカタクチイワシ漁獲量の推移

2. 平成19年1～3月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）のまき網及び棒受網】

鹿児島県4港のまき網で607.7トン(前年比156%, 平年比189%)の水揚げで、前年・平年とも大きく上回りました。北薩海域の棒受網では240.6トン（前年比66%, 平年比73%）の水揚げで、前年・平年を下回りました。

まき網では中～大羽銘柄(1歳魚・平成18年生まれ, 2歳魚・平成17年生まれ)を主体に好調な水揚げがあり、比較的好調に推移しています。

3. 平成19年4～6月期の見とおし

期間の前半は中～大羽銘柄(1歳魚・平成18年生まれ, 2歳魚・平成17年生まれ)が主体で、後半は小～中羽銘柄(0歳魚・平成19年生まれ)が漁獲の主体となり、前年・平年を上回るでしょう。

(根 拠)

中～大羽銘柄(1歳魚・平成18年生まれ, 2歳魚・平成17年生まれ)の来遊量が好調に推移しており、来遊水準は高いと考えられます。また中～大羽銘柄を産卵親魚とする小～中羽銘柄(0歳魚・平成19年生まれ)についても、来遊水準は比較的高いと考えられます。

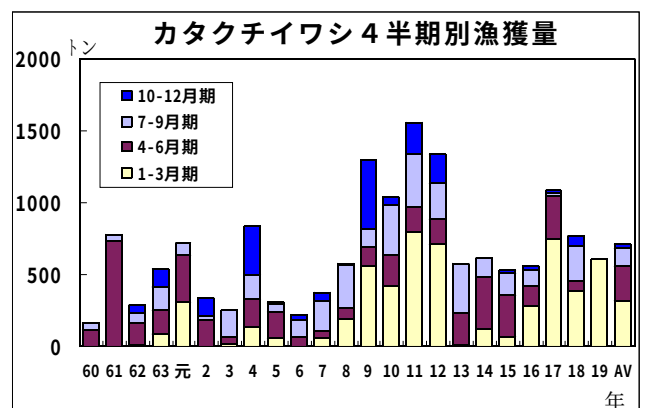
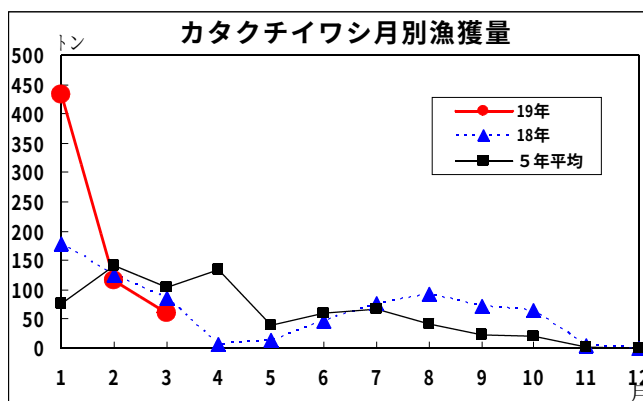


図 カタクチイワシまき網漁獲量変化(4港計)

※5年平均は平成14～18年の平均値、平成19年は3月28日までの水揚量を使用。

【その他の魚種】

〈ムロアジ類（4港計）〉

1. 経年変化及び平成18年10～12月期の漁況の経過

ムロアジ類の漁獲量は、平成2年の21,700トンピークに減少傾向を示し、平成12年は、昭和58年以降最低の1,819トンとなりました。平成13年以降はやや増加し、平成14年には4,418トンとなりましたが、その後は減少し平成18年は2,253トンとなりました。

平成19年1～3月は、薩南海域でクサヤモロ（銀ムロ・青ムロ）主体の漁獲があり、期全体では423トンの水揚げで、前年の95%及び平年の55%でした。

2. 平成19年4～6月期の見とおし

漁獲の主体は、クサヤモロ（銀ムロ・青ムロ）で、薩南海域に漁場が形成されるでしょう。来遊量は、低調であった前年・平年を下回るでしょう。

〈オアカムロ（4港計）〉

1. 経年変化及び平成19年1～3月期の漁況の経過

オアカムロの漁獲量は、平成元年の5,300トンピークに減少し、平成6年には1,823トンとなりましたが、その後は増加傾向となり、平成10年は3,413トンでした。その後、減少傾向となり、平成18年は1,184トンとなりました。

平成19年1～3月は、主に薩南海域で漁獲があり、期全体では141トンの水揚げで前年の21%及び平年の31%でした。

2. 平成19年4～6月期の見とおし

来遊量は、低調であった前年は上回るものの、平年を下回るでしょう。

〈マルアジ（アオアジ）（4港計）〉

1. 経年変化及び平成19年1～3月期の漁況の経過

マルアジの漁獲量は、平成2年以降低調に推移しましたが、平成7年には1,430トンに増加しましたが、再び減少し平成11年は639トンでした。平成12年以降は増加傾向を示し、平成15年は3,150トンとなりました。平成16年以降は大きく減少し、平成18年は252トンでした。

平成19年1～3月は、主に北西薩海域で漁獲があり、期全体では327トンの水揚げで、前年の2,441%及び平年の74%でした。

2. 平成19年4～6月期の見とおし

漁獲の主体は、マルアジ豆・小（1歳魚・平成18年生まれ）で、マルアジ中・大（2歳以上）も漁獲されるでしょう。

来遊量は低調であった前年を上回り、平年並みとなるでしょう。

（根 拠）

漁獲の主体は、近年の漁獲パターンや現在の漁況経過から予測しました。

マルアジ中・大（2歳以上）及びマルアジ豆・小（1歳魚）の来遊量は、3月までの漁況経過から、来遊量は低調であった前年を上回り、平年並みであると考えられます。

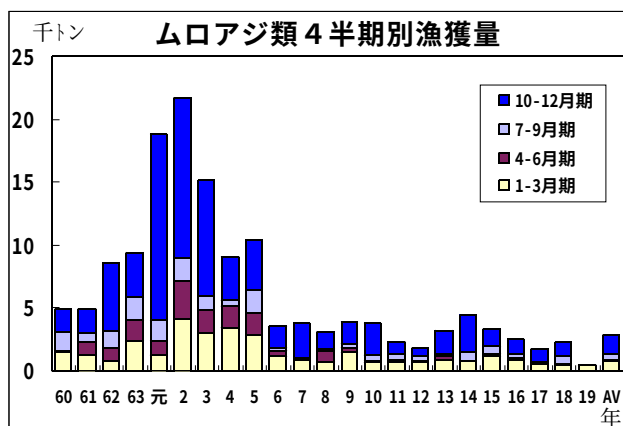
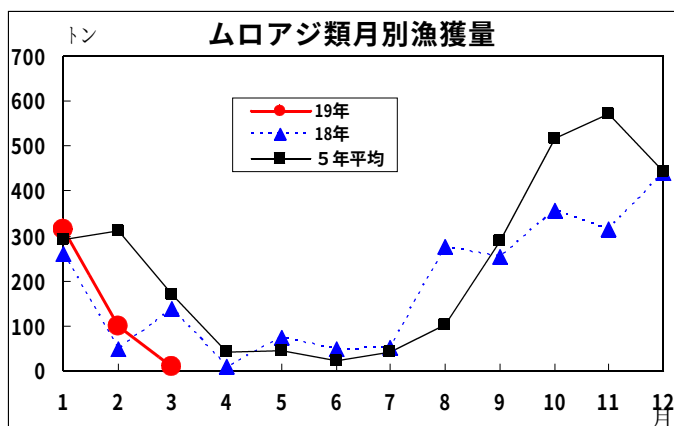


図 ムロアジ類まき網漁獲量変化(4港計)

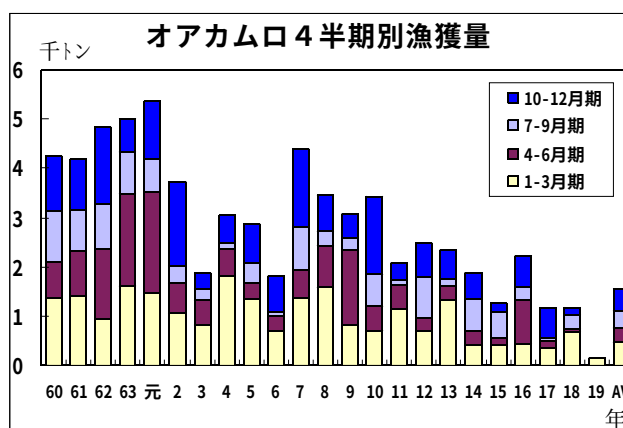
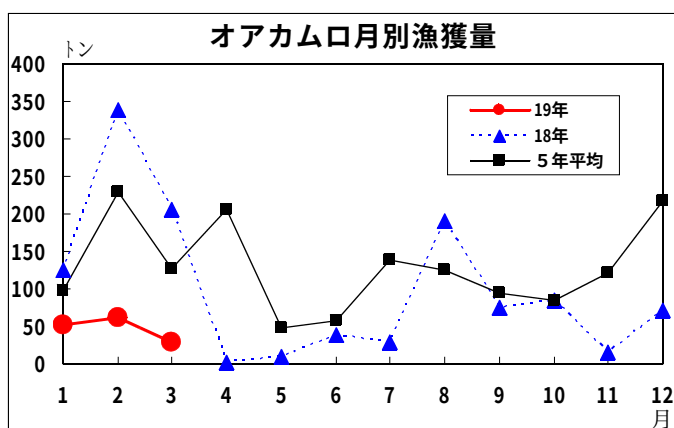


図 オアカムロまき網漁獲量変化(4港計)

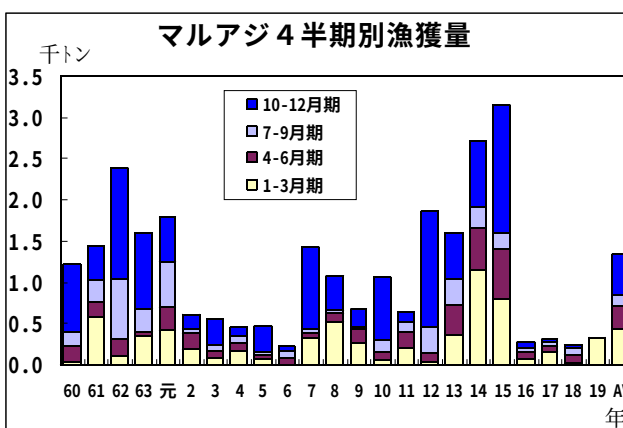
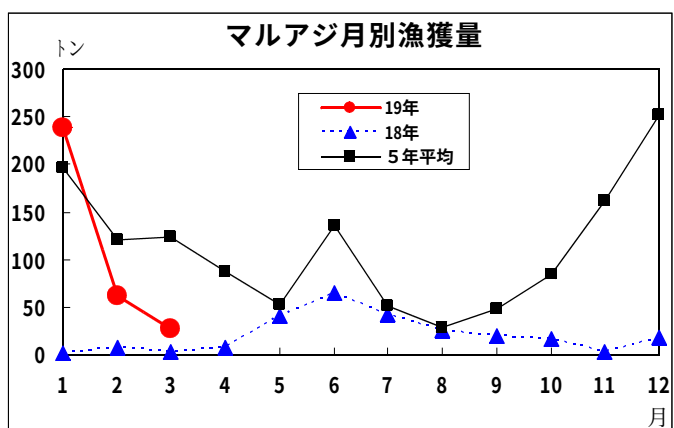


図 マルアジ (アオアジ) まき網漁獲量変化(4港計)

※5年平均は平成14～18年の平均値，平成19年は3月28日までの水揚量を使用。

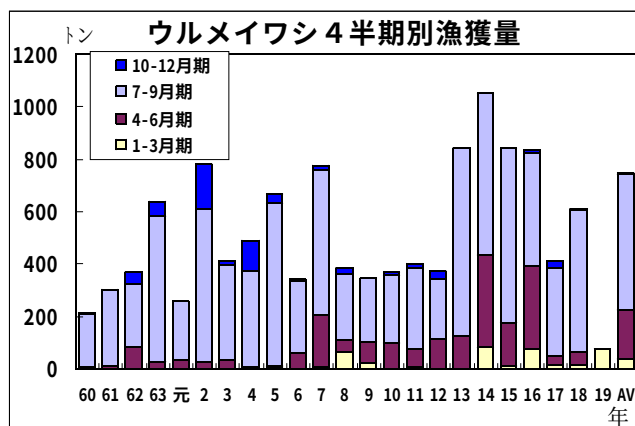
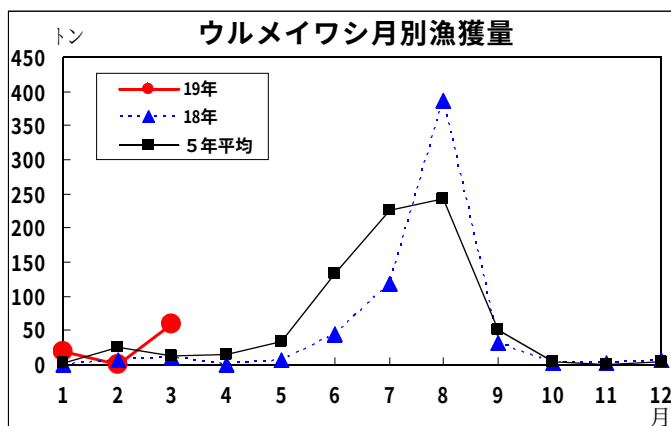


図 ウルメイワシ敷網漁獲量変化(阿久根港)

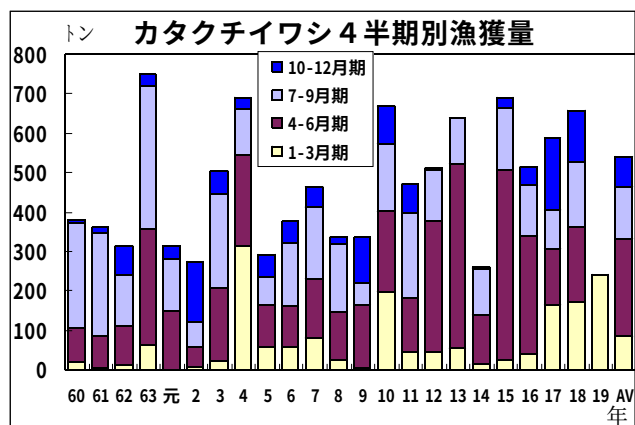
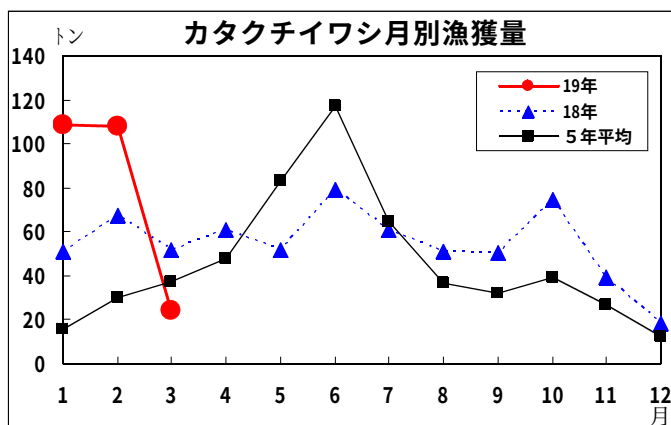


図 カタクチイワシ敷網漁獲量変化(阿久根港)

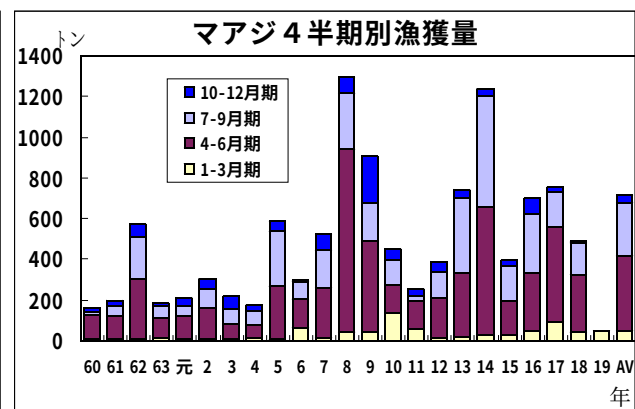
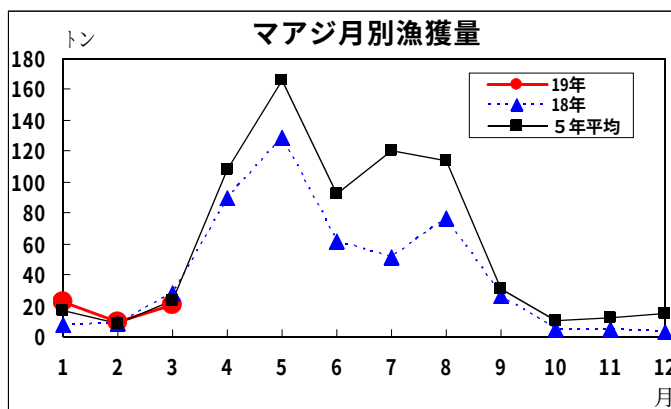


図 マアジ定置網漁獲量変化(内之浦港)

※5年平均は平成14～18年の平均値，平成19年は3月28日までの水揚量を使用。